

## 自分に必要な力

弘前市立第一中学校

三浦可帆

私は『西の魔女が死んだ』という本を読んだ。この本を選んだ理由は、去年この本の著者である梨木香歩さんの『裏庭』という作品を読み、集中して読めたため、他の作品も読んでみたいと思ったからだ。

主人公は「まい」という中学生だ。クラスの中で「敵」に決められ、学校に行くのが嫌になってしまい、ひと月あまりを「西の魔女」ことおばあちゃんの家で過ごす。そこで「魔女修行」が始まり、様々なことを学んでいくという物語だ。

この話の中で印象に残っているおばあちゃんの言葉が二つある。

一つ目は、「魔女になるためにも、いちばん大切なのは、意示の力。自分で決める力。自分で決めたことをやり遂げる力です。」という言葉だ。なぜなら、意示の力は、魔女だけでなく、普通の人間にも生きていくために必要な力だと思っただからだ。私はいつも人の指示を待ってしまい、自分で決めて行動することが全くできない。そのため、この言葉を目に

した時、これはどこでも同じく、大切なことなのだと思った。魔女修行を始めた時に、おばあちゃんはまず基礎トレーニングとして「精神を鍛える」ことをあげた。そしてこの言葉を発して、「そんな簡単なことついていいはずですけれど、そういう簡単なことが、まいにとつてはいちばん難しいことではないかしら」と言った。私も簡単だと思うことほど難しいと思う。自分で決めることは難しく、迷うことがたくさんあるが、その分責任をもつてやり遂げることができるようになると考えた。部活や学校生活で少しずつ簡単なことからでも自分で決めて、集中して取り組めるようになりたい。そして、無駄な時間を減らして自分がやりたいことをより多くできる生活をした。

二つ目は、「死ぬ、ということはずっと身体に縛られていた魂が、身体から離れて自由になることだと、おばあちゃんは思っています。きつとどんなにか楽になれてうれしんじゃないかしら」という言葉だ。理由は、死ぬということを暗

くどらえず、楽になれると考えているのがすごいと思ったからだ。まいは父親に、人は死んだらどうなるのかと聞いたことがあったが、あまり良い答えをもらえず、おばあちゃんにも同じことを聞いた。そのときにまいをなくさめながらおばあちゃんが自分の考えを話した。最近、戦争に関する番組や歴史人物の本を読んで、「死ぬ」ということについてどう思うの、怖い」と考えることがよくある。魂が身体から離れるという考えは自分にもあったが、生きていた頃の自分の意識は残っているのか、魂はどこにいくのか、ということを考えて不安になる。「死ぬ」ということは暗いイメージが多いが、長い間頑張った魂が休けいするために、人間には死があるのかなと思った。そして、また新しい身体に魂が入り、生まれ変わった時に前世の生活、自分の力が役に立てば良いなと思う。

「死」に関するだけでなく、何に対しても良いイメージを作ることとはとても大切なことだと思う。私には苦手なことがあるとマイナスなことばかり考えてしまうという短所がある。まいのおばあちゃんは、まいにとって悪い印象の人がいてもその人の長所を知っていると思う。そのように、まずはプラスになることを探して努力していけば、少しずつでも楽しくなることが増えると思う。そのため、楽しむためには

文句ばかり言うのではなく、人の倍努力をして授業などの回数が増えるたびに、何か成長したことがあるということが必要だと思う。そしてその状態が続くことが最も良いことだと思う。おばあちゃんが教えてくれることは誰にとっても大切なことで、まいも物語が進むにつれてどんどん明るくなったと思う。まいは転校することになるが、私がまいに声をかけるとしたら、新しい学校では、まいが前からもっていた真つすぐ生きようとする強さを捨てずに楽しんで頑張つてねと伝えたい。

その後のまいの日常が書かれた『渡りの一日』に登場するシウウコは、まいの強さを認めているからこそ仲良くできていると思う。シウウコの、自分と違う考え方をしている人でも最初から否定しないという考え方を見習って、様々な考え方を自分もできるようにしたいと思った。

この本を読んで、私は自分で考えて行動する力、物事に対して前向きな姿勢で取り組む力、自分にはない考え方を知らうとする力が今の自分に必要な力だと思った。これから、何事に対しても努力をして自分の力にできるものをつくっていきたい。そして大人になってふり返った時に、後悔することが少なく、楽しかったと思えることを増やしていきたい。